■ 海外情報 ■

1936年ベルリンオリンピックの選手村

お茶の水女子大学名誉教授　田中　辰明

はじめに

ヒトラーが正当な選挙で政権を取得したのは1933年である。ベルリンでオリンピックを開催する事を決定したのは1931年パリで開催された第11回夏季オリンピック開催都市決定の投票結果であった。ベルリンオリンピック開催はナチスが政権を取る以前に決定していたのである。

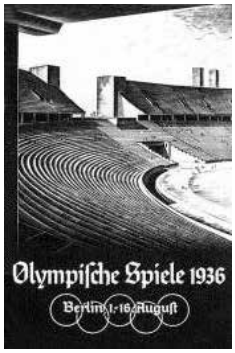

写真１　1936年ベルリンオリンピックのポスター 文献１)

1936年８月１日から16日にかけてベルリンで夏季オリンピック大会が催された。ナチスドイツが国威昂揚を目的に開催したものであったが、開催当初から問題があった。ユダヤ人排斥を国是としていたナチスドイツが主催するので、英国、米国がボイコットしようとした。そこで人種差別政策を一時凍結する事でベルリンでの開催が決まった。ヒトラーがオリンピック開催を決めた後はオリンピックをアーリア民族の優秀性と自らの権力を世界中に見せつける絶好の機会ととらえた。そしてオリンピック競技場、オリンピック村、空港、道路、鉄道、ホテルを次々に建設していった(写真１)。オリンピック村はベルリンの中央部から西に40㎞ほど離れたElstal(エルシュタール)という村にある。ベルリン市中心部からハンブルグに向かうアウトーバーン５号線に沿った村である。競技の行われたオリンピックスタジアムからは西の方に約18㎞離れた場所である。

筆者は1971～1973年ベルリン工大のヘルマン・リーチェル研究所の客員研究員をしていた。当時は東西ドイツに分かれていた時代で、西ベルリンから西ドイツに陸路を車で行こうと思うと、ハンブルグやハノーバーに向かおうとする場合シュターケン(Staaken)というところが国境になっていて、ここで東ドイツのビザを取得する必要があった。このビザ発行手数料が東ドイツの外貨収入になっていた。東ドイツ側から西ベルリンに入る際は、車内から車の下まで鏡を入れられ厳しい検査があった。これは東ドイツ人が車に隠れて西ベルリンへ亡命するのを防いでいたのである。いつも国境検査で時間を取り、やっと東ドイツの整備の悪い自動車道路を走って西ドイツへ向かった。この国境検査場を少し過ぎるとエルシュタールという村があった。ここは旧東独であったので、開発がされず、当時の選手村がそのまま残っている。2015年10月４日(日)に友人のゾビツカート夫妻が車で案内して下さったので報告を行う。

写真２　1936年ベルリンオリンピックを観戦するヒトラー総統 文献１)

写真３　1936年ベルリンオリンピック開催に際し、ブランデンブルグ門をパレードするヒトラー総統

１. 1936年開催のベルリンオリンピック

参加国と地域は49、参加数は4066人(男子3,738人、女子328人)21競技129種目が行われた。開会宣言はア

写真４　ベルリンの聖火台に到着する聖火リレー選手

写真５　レニ・リーフェンシュタールの旧宅ベルリン市ヴィルマースドルフ（Wilmaersdorf）

ドルフ・ヒトラー総統が行った（写真２、３）。古代オリンピック発祥の地ギリシャのオリンピアで聖火を採火し、松明（タイマツ）でベルリンのオリンピアスタディアムまで運ぶ初めて聖火リレーも行われた（写真４）。ドイツ政府は聖火リレーの為にルートの調査を綿密に行い、第二次大戦でドイツ軍が調査結果を利用したという話もある。このオリンピックでは日本人選手は大活躍し、前畑秀子が女子200m平泳ぎで、その他８名の選手が金メダルを取得している。ラジオ放送で河西三省アナウンサーの「前畑がんばれ、勝ッタ、勝ッタ！」の連呼絶叫実況は日本の聴取者に熱狂的な興奮を巻き起こした。またナチス党のお抱え映画監督とも呼ばれた女流映画監督レニ・リーフェンシュタールが２部作の記録映画を作成し評判を呼んだ。この作品は1938年のヴェネツイア国際映画祭で金賞を獲得した。それ以来オリンピックの記録映画が作られる事がIOCにより規則となった。レニ・リーフェンシュタールの旧宅は今もベルリンに残っている。筆者がベルリンで定宿としているホテルのすぐ近くである（写真５）。

２．オリンピック選手村

選手村の設計はオリンピック競技場（図１）と同じく、ナチス建築家ヴェルナー・マルヒ（Werner March、1894～1976）（写真６）である。ヴェルナー・マリヒが当時の内務大臣ヴィルヘルム・フリック（Wilhelm Frick）に模型を使用してオリンピック村の計画説明をしている写真もあった。1935年７月との事であった（写真７）。

ヴェルナー・マルヒの代表作ベルリンのオリンピックスタジアム（1934～1936建設）はナチス建築の例として現存している。この作品に対しブルーノ・タウトは日本からトルコへ出国する直前の1936年９月20日の日記に所感を述べている。「人間の知覚は、私たちが拡声器、望

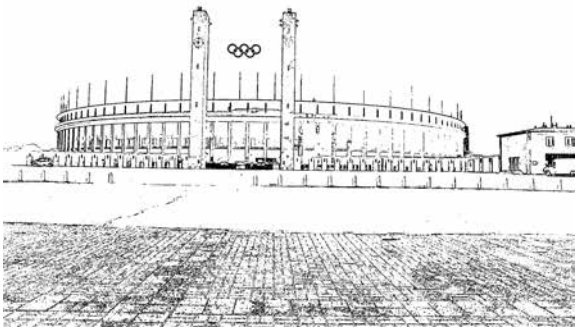

図１　ヴェルナー・マルヒ設計によるオリンピックスタジアム
(Olypiastadion,1934-36, Charlottenburg,Olympischer Platz、Berlin)

写真６　オリンピックスタジアム、オリンピック村を設計したヴェルナー・マルヒ（Werner March）文献１）

写真７　1935年７月に内務大臣ヴィルヘルム・フリック（Wilhelm Frick）（中央）に模型でオリンピック村の設計を説明するヴェルナー・マルヒ（右）

写真８　1936年当時の選手村入口にあったレセプション建物 文献１）

写真９　オリンピック選手村の敷地図

遠鏡、照明塔などのメカニズムを自由に活用するようになってから、著しくこの能力が高められた。この事実はまた、建築における新機軸でもある。これによって私たちの知覚は、人間の生具の間隔を遥かに超出する広大な範囲に達した。例えばベルリンのオリンピック競技場では、10万人もの群衆が同時に見、かつ聞くことができたのである。確かにマルヒは非常に勤勉な建築家だし、またその作品には雅致がある。しかし今度のオリンピック建築はこれから先き長い間、建築界に俗物的な観念を植え付けることになるかも知れない。要するに「頭脳」と芸術とが欠けているのだ。巨大な軸を持って競技場全体を貫き（これは軸に対する偏執にほかならない）、この軸を挟んで相対する塔を数か所立て、こうして会場を任意に区切っているが、その印象は射撃場そっくりである。」（篠田英雄訳）

選手村の敷地面積は単に広大であると言うだけで実際の数字が出てこない。選手宿舎としては136棟の平屋建物、５棟の２階建て建物、選手村入口のレセプション建物（写真８）、調理棟と38の食堂からなるレストラン棟（国民の食堂“Speisehaus der Nation”と呼ばれた）、管理棟、水泳プール、サウナ、体育館、病院と医務棟、ヒンデンブルグハウスと呼ばれる建物からなっていた。オリンピック選手村には全体の敷地図が張り出されていた（写真９）。これによると図面の左下（敷地の南西部）の弓状をした建物が選手村の入り口レセプション建物である。その右側にある「やすり」のような形をした建物がヒンデンブルグハウスである。敷地の中央、東側に体育館、その西側に屋外練習場を挟み「エ」の字型の屋内水泳プールがある。その北東にラグビーのボールのような形をしている建物が「国民の食堂」と呼ばれた調理棟と食堂である。敷地の南西部には湖が広がっておりその東の端にサウナがあった。現在はその湖もかなり枯れていて雑草が茂っていた。病院と医務棟は敷地全体のほぼ中央にあった。それ以外はほぼ選手や大会役員の宿舎棟である。敷地の北部に日本、ハンガリー、ブラジル、ポーランド、デンマーク、チェコスロバキア、ルーマニア、ドイツの選手宿舎がその他の国の宿舎から少し分離されたようにして存在している。これはこれらの国々は「あてがいぶちの宿舎でなく、独自に宿舎を自分仕様で建てたので、北側に纏めた」と案内に書かれていた。敷地内に点在する選手宿舎棟は補修もされておらず、損傷が進んでいる（写真10）。選手宿舎を左右に見ながら敷地内歩道を進むとやはり、損傷の進んだ選手宿舎並びに調理、食堂棟が

写真 10　敷地内に点在する選手宿舎（相当に損傷が進んでいる）

写真 11　選手宿舎と後方の食堂棟

写真 12　上位 10 ケ国の獲得メダル数を表示した看板

見えてきた(写真11)。ある選手宿舎棟の前に1936年ベルリンオリンピックで各国が獲得したメダル数を示した表が掲示されていた(写真12)。これによると金メダル33個、金、銀、銅合計89個を取得した開催国ドイツが１位になっている。それに米国、ハンガリーが続いている。日本は金８、銀４、銅８合計18個取得で健闘している。その選手宿舎を通りすぎると、調理棟と38の食堂からなるレストラン棟(国民の食堂“Speisehaus der Nation”と呼ばれた)が現れた。ここで各国(または地域)の選手の交流が行われたであろう、立派な施設である(写真13、14、15)。またオリンピック開催の賑やかだった当時の写真を示す(写真16)。食堂には当時のメニューも表にして残っていた。世界各国の選手の口に合うようにまた宗教にも配慮した多彩なメニューである。敷地全体に芝生が広がり、敷地の手入れは良い。優れた散歩道と言って良い。食堂棟を敷地の東側に歩きやや南側にさがると、広い芝生のグランドが広がっていた。ここは陸上の練習場であった(写真17)。現在でも整備が行き届いている。この練習場の西側に室内水泳プールがある。火災を出し、現在では使用できない状態であるが、飛び込み台付の立派なものである(写真18)。この写真は水泳プールのガラス越しに撮影したものである。水泳プールの東側外壁はガラスブロックを嵌め込んだ瀟洒なものである。とてもナチス好みの建築とは思えないモダンなものである(写真19)。芝生の陸上練習場の南にはカナダの選

写真 13　国民の食堂(Speisehaus der Nation)と呼ばれたレストラン棟

写真 14　国民の食堂(Speisehaus der Nation)と呼ばれたレストラン棟

写真 15　国民の食堂(Speisehaus der Nation)と呼ばれたレストラン棟

写真 16　1936 年当時の賑わっていた選手村食堂棟 文献1)

写真 17　陸上の練習場

写真 18　飛び込み台付の練習用屋内水泳プール

写真 19　屋内プールの外壁にはガラスブロックが嵌め込まれている

写真 20　管理棟（ここから指令が発せられた）

写真 21　当時存在した湖の跡、現在は雑草が茂っている。この湖の端にサウナがあった。

写真 22　三段跳びの練習用に設けられた砂場と広がる芝生

手宿舎があった。そのさらに南側に管理棟があった。そこから指令を出していたのだ（写真20）。

管理棟のさらに南は開催当時は湖があり、湖の東側にサウナがあった。現在は湖の水は干上がり、牧草地のような状態であった（写真21）。かって湖があった場所の北側は芝生が広がっている。選手たちが屋外の散歩を楽しんだり、交流の場ともなったのであろう。芝生の中に三段跳びの練習に使用されたのであろう砂を敷き詰めた場所もあった（写真22）。この芝生の一角に1896年にアテネで開催された第１回近代オリンピックのドイツ人メダリスト、カール・シューマン（Carl Schumann）を顕彰する石碑があった（写真23）。氏は体操とレスリングの選手であった。敷地の南側、むしろ選手村入り口のレセプション棟に近い場所にヒンデンブルグハウスが比較的良い保存状態で残っている（写真24）。この棟はオリンピック開催を推進してきたヒンデンブルグ[註1)]を称えて

写真 23　1896 年アテネで開催された第一回近代オリンピックで金メダルを獲得したドイツ選手シューマンを称える顕彰碑

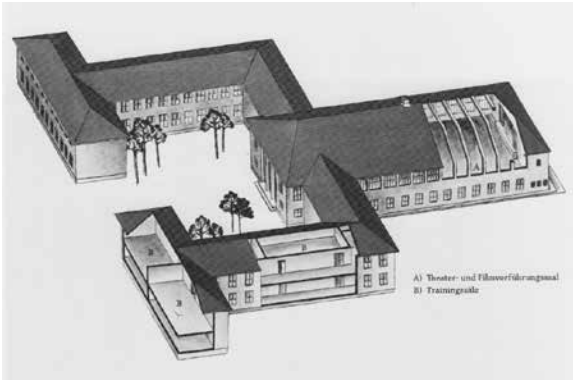

図 2　ヒンデンブルグハウス鳥瞰図 [文献 1)]

名称がつけられた。

ヒンデンブルグハウスは食堂棟が軽量感、透明性があり、明るい感じであるのと対照的に旧来のドイツ建築、重厚性を重視した感じである。他の建物は曲線を保った建物であったり、曲線状に配置されているのに対し、このヒンデンブルグハウスは左右対称の２階建て、重厚感のある建物である。ここでは映画館、劇場、催しもの場があり、選手たちの交流が行われたらしい。また奥の体育館では競技に備えて練習が行われた（図２）。

３．オーエンス選手の活躍

米国のジェーシー・オーエンス（Jesse Owens、1913－1980）は男子短距離、跳躍種目で合計４つの金メダルを取得した。ヒトラーは白色人種の優位性を誇示する事を目的に開催したベルリンピックであったが、ヒローとなったのは黒人のオーエンスであった。従って選手村でもオーエンスの偉業を称える記録が保存されている。オーエンスが使用した宿舎は他の宿舎と異なり、修繕が行われ、見学が可能なように保存されている。オーエンスが使用していた宿舎を写真25に示す。またオーエンスの部屋を写真26に示す。宿舎の前にドイツの名釜マイセンのマークがあるようにマイセンがスポンサーとなり、建物の保全を行った。宿舎の写真に見るように個室ではあるがベッドは二つ用意されている。窓に向けてテーブルが用意され、当然椅子が準備されている。温水暖房が施され、窓下に白色塗装の放熱器が供えられて

写真 24　ヒンデンブルグハウス

写真 25　オーエンスが宿舎として使用していた建物

写真 26　オーエンスの部屋

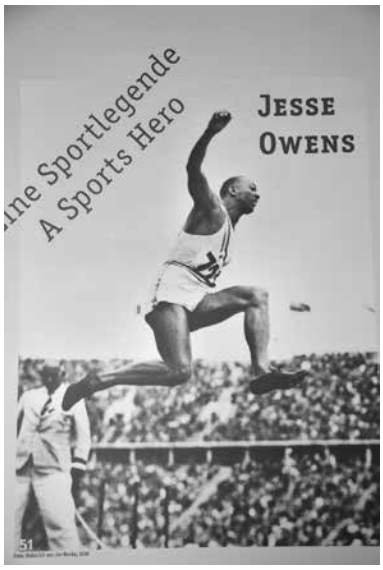

写真 27　跳躍種目で金メダルを獲得した時のオーエンス

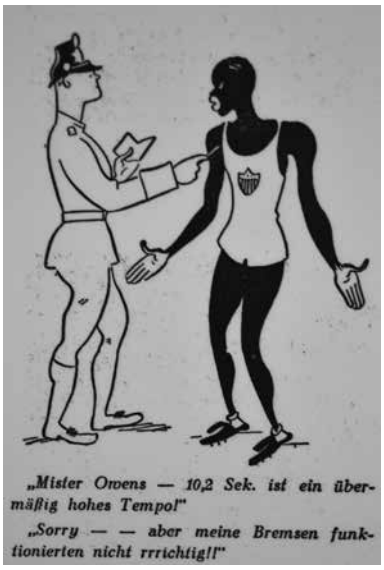

写真 28　当時発行されていたオリンピック新聞 1936 年 8 月 1 月号より
警官「オーエンスさん、100 メートルを10. 2 秒とはとんでもない速さです！」
オーエンス「済みません、ブレーキが正しく作動しなかったものですから」

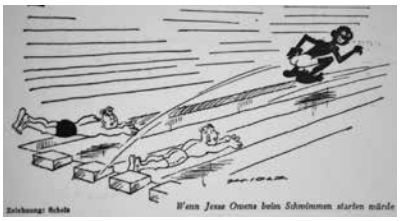

写真 29　オーエンスが水泳競技に出場していたら

写真 30　オーエンスの 50 年後（オーエンスは 1980 年に 66 歳で他界した。ベルリンオリンピック開催の 50 年後は 1986 年であるから、この絵よりも早く亡くなったことになる）

写真 31　誰がオーエンス選手だ？

写真 32　短距離で金メダルを獲得した際のオーエンス選手

いる。オーエンスには様々な逸話が残っており、その一部がオーエンスの部屋に掲示されていた。写真27に跳躍種目で金メダルを獲得したオーエンス、写真28に当時発行されたオリンピック新聞1936年８月１月号より、警官が「オーエンスさん、100mを10.2秒とはとんでもない速さです」オーエンスは「済みません、ブレーキが正しく効かなかったもので」と答えている。写真29は、「オーエンスが水泳競技に出場したら」、写真30は「オーエンスの50年後」。実際には1980年に亡くなり、この時66歳であった。50年後は1986年であるから、残念ながらこの絵の状態になるより早く亡くなったのである。写真31は「誰がオーエンス選手だろう？」、写真32は、オーエンスが短距離で金メダルを獲得した時のものである。

４．その後のオリンピック村

オリンピック村は旧東ドイツにあった。東西冷戦時代はこの敷地内にソ連軍の兵舎が建設され、西ベルリンに睨みを利かせていた。これらは当時東ドイツで良く建設された工場生産（蒸気養生を行う）によるコンクリートパ

写真 33　選手村に残る旧ソ連兵の兵舎

ネルを貼り合わせて建設する工法により建設されていた。ソ連軍が去った後はオリンピック施設同様に廃墟となっている(写真33)。

おわりに

この選手村はドイツ信用銀行(Deutsche Kreditbank AG)の援助により説明の看板などが設置されている。しかし本格的な保存を行うには十分な資金では無いようである。1936年ベルリンオリンピックの際のオリンピック村は旧東ドイツ領に建設されたので、再開発もされず、損傷は激しいものの当時の威容を残して現存している。筆者が訪問したのは2015年10月４日の日曜日であったが、訪問者も極めて少なかった。突然およそ80年昔の栄華の地にスリップインした感じがした。当時は大いに賑わっていたであろうに、静寂で鳥の声も聞こえない、時々秋の風がほおを撫でていく程度であった。また選手村周辺に建設された旧ソ連軍の兵舎も東西冷戦解除と共に兵隊は去っていき、「兵どもが夢の跡」を思わせる。特に東欧圏で得意な技術であった蒸気養生を行って製作したコンクリートパネルで組み立てる工法による集合住宅がそのまま残っていて懐かしい。この工法に関しては筆者が大林組の研究所に在職していた頃、上司の命により、東ドイツで発行された原書を辞書を引き引き翻訳した事を懐かしく想いだす。なかなかはかどらない翻訳であったが、国内で、この工法により実験住宅を建設する事が出来たのも懐かしく想い出す。しかし現在ではこの工法を使用する人はいないであろう。オリンピック村は歴史を残す散策地としては優れた環境である。しかし忘れられた遺産と言われても仕方がないかもしれない。

謝辞

筆者がベルリンを訪問するためにいろいろの建物を案内して下さるゾビツカート夫妻(Gerd Sowitzkat, Rita Sowitzkat)に今回もお世話になった。記して謝意を表す(写真34)。

写真 34　ご案内いただいたゾヴィツカート夫妻(この写真は今回のものでなく 2014 年夏に訪問しベルリン郊外のシュプレーヴァルトをご案内いただいた際の写真である)

〈註〉

1）Paul Ludwig Hans Anton von Beneckendorff und von Hindenburg［1847～1934］ドイツの軍人･政治家。普墺(ふおう)戦争・普仏戦争に参加。第一次大戦ではタンネンベルクの戦いでロシア軍に大勝して国民的英雄となる。1925年、大統領に就任。32年再選されたがナチスに政権を委ね、ワイマール共和国の終末を早めた。ベルリンオリンピック開催を推進したが、開催前に死去。

〈参考文献〉

1．Margrit Kühl, Wolfgang Schäche, Christian Schwan, Hans Jochahim Teichler „Vergessener Ort Olympisches Dorf 1936“, Strauss
2．https://de. wikipedia. org /… / Olympisches _ Dorf _ (Berlin)
3．田中辰明・柚本玲「建築家ブルーノ・タウト−人とその時代、建築、工芸　オーム社
4．田中辰明「ブルーノ・タウト・・日本美を再発見した建築家」、中公新書2159
5．田中辰明「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」東海大学出版会
6．田中辰明「バウハウス(ヴァイマール)」月刊建築仕上技術2014年８月号、工文社
7．田中辰明「バウハウス(デッサウ)」月刊建築仕上技術2014年９月号、工文社
8．田中辰明「バウハウス(ベルリン)」月刊建築仕上技術2014年10月号、工文社
9．田中辰明「ナチス好みの建築」月刊建築仕上技術2014年11月号、工文社
10．田中辰明ホームページ　http://tatsut. org /